



27 文化人類学への誘い

桜美林大学人文学系リベラルアーツ学群

奥野 克巳 教授

このコーナーでは、私たちの社会や生活に身近な研究テーマをわかりやすく紹介する。第一線で活躍されている研究者の研究内容を中心に、学問の仕組みや今後の可能性などについて、インタビューする。

地球上には、私たちが前提としている倫理や社会規範とは全く異なる価値観で生活を営んでいる人々がいます。そういう人たちの社会に入り、共に生活することを通じて、その社会の根底にあるものを追究する学問が文化人類学です。彼らの生活様式を詳細に描き出し、人間社会の普遍性と個性（多様性）を明らかにすることで、文化に対する幅広い視野を獲得することが目的です。現代社会に暮らす私たちの生活を見つめ直す上でも極めて有効な学問分野です。

異文化にじかに接することで 文化の多様性に迫る

私たちは、働いてお金を稼ぎ、お金を払って食べ物を買うことや、学校に通うことなどを、当たり前のこととして生活しています。その一方で、その日に採集したものだけを食べて、ほとんど学校に行かずに生涯を終えるという人々もいます。このように、世界にはさまざまな人々が暮らしており、それぞれの人々の集団には多様な文化が存在しています。

現在ではインターネットが発達し、私たちは居ながらにして世界の隅々に至るまでその様子を眺めることができますが、文化人類学では、研究対象とする自分たちとは異なる文化の中で、一定期間暮らすことを研究の出発点としています。その人たちと寝食を共にし、各種の儀礼と一緒に参加しながら、その生活様式を観察して生き方や考え方を探っていくのです。

異文化の現場で学び 社会・文化の根底にあるものを探り出し 人間の普遍性と個性（多様性）を問い直す

ただし、単に異なる文化の中で生活し、見聞きしたことを体験記にまとめるだけなら、個人的な経験で終わってしまいます。その体験を学問にするには、それまでに蓄積されてきた「民族誌（エスノグラフィ）」に照らし合わせて検証する過程が欠かせません。民族誌とは、フィールドワークを通して、対象とする人々の暮らしぶりや社会構造などを詳細に記述した学術的な記録です。文化人類学の研究とは、自らの経験によって得られた知見を、他の民族誌と照合しながら客観的に捉え直すことを通して、新しい民族誌を書き上げることでもあるのです。

文化に優劣はないとする 「文化相対主義」を研究の基本姿勢とする

文化人類学の研究にあたって最も基本的な概念とされているのが「文化相対主義」と呼ばれる考え方です。F. ボアズ（1858～1942）などによって確立された概念で、「一つひとつの文化は独自の価値を持ち、それゆえ絶対的な物差しで優劣をはかることはできない」という考え方です。20世紀の文化人類学がたどり着いた最も重要なメッセージといえます。

というのも、それ以前の19世紀の文化人類学においては「文化進化論」という考え方が支配的でした。ダーウィンの唱えた進化論を人間の社会や文化にも適用したもので、西欧の文化は進化の頂点にあり、未開社会は（西欧諸国が到達した文明社会に至る）進化途上の段階にある



<写真>現地での聞き取り調査の様子



(奥野先生提供)

のだから、西欧社会は未開社会を文明段階に引き上げる役割を持っているとする考え方です。このような自文化中心主義的な考え方は、植民地支配を正当化するためにも利用されました。文化相対主義は西欧の文化が進化の頂点であるという考え方への批判でもあったのです。

ところが、1970年代になると、文化相対主義への批判が登場します。「文化に優劣はない」とそれぞれの文化の違いを尊重し過ぎると、人道的に容認できないような風習でも「それも彼らの『文化』だから」と認めることになってしまいます。文化の名のもとに他者の文化の問題点を放置する無責任な態度ではないかという批判です。

また、「それは文化が違うのだから仕方がない」として文化の違いを絶対化してしまうことは、人間を文化の違いによって分断することにもつながります。異文化との対話の窓を閉ざし、異なったそれぞれの文化の内部に他者を閉じ込めてしまうことは、文化のアパルトヘイトともいうべき状況ではないかとの指摘もありました。

このため現在では、文化の多様性は認めつつも、人道主義などの倫理観は堅持したまま異文化を理解しようとする議論も出てきています。

とはいえ文化人類学の研究自体は、基本的には文化相対主義に貫かれています。異なる文化を理解するには、まずはその社会に飛び込み、先入観を排して相手の世界を相手の側から理解しようと努めることが必要です。人間はともすれば自民族中心主義に陥りがちですが、自文化の価値観に縛られず、異文化のありのままの姿をよりよく理解するためには、文化の複数性と対等性を承認する文化相対主義の態度は欠かせません。そのような姿勢が、研究対象とする文化そのものの理解、ひいては研究者自身の所属する文化の相対化にもつながるからです。

このため、文化人類学の研究は次のような流れで進められています。

フィールドワークを基本とし 「聞き取り調査」や「参与観察」を実施

まずは、ライブラリーリサーチです。自分が興味を抱いている地域やテーマに関する文献や資料を集めて基本的な知識を蓄積します。例えばシャーマニズム^(注)について研究したいと思ったら、シャーマニズムに関する文献や、そうした風習が色濃く残る地域に関する資料などを活用して、ある程度網羅的な準備学習を行います。

フィールドワークに入る前のこの段階で、研究対象を具体的に絞り込み、どの地域のどの民族を対象として、何について研究するのかをはっきりさせます。また、フィールドワークを行うために必要となる「言語」を学んだり、調査資金を調達するための提案書を書いたり、現地の政府の許可を得たりと、実際にフィールドワークを行うための対応や手続きも必要になります。

それが終わるとようやく、現地でフィールドワークを行うこととなります。フィールドワークとは、現代文化人類学の祖といわれているB. マリノフスキー(1884～1942)が確立した研究手法です。フィールドワークの期間は、調査の目的や事情によってさまざまですが、現在では、まずは2年間程度のフィールドワークに取り組むことが、文化人類学者として一人前になるための第一歩とされています。1年間で一回りする現地の生活サイクルを2回以上繰り返すことで、より深みのある調査を行うことができるのです。

文化人類学におけるフィールドワークの最も特徴的な点は、現地の人たちの生活や文化を、外部から観察するのではなく、現地のホストファミリーに受け入れてもらい、そこで一緒に生活しながら、集団の内部からその行動様式を理解していくことにあります。そのため、最初の1年間の大半は、言語の理解と運用および「ラポールづくり」に充てられます。ラポールとは相互の信頼関係のことです。通訳を介さない直接的なコミュニケーションをとることができるようになり、生活を共にすることで信頼関係を構築して初めて、こちらの知りたいことに答えてもらえるからです。

初めて現地に行って、通訳を介さずにコミュニケーションをとることができるかどうか、疑問に思う人もい

(注) シャーマニズム…神や精霊と直接的に接触・交流して、神意を伝え、予言や病気治療などを行う、宗教的職能者であるシャーマンを中心とした宗教実践のこと。

るでしょう。私の経験では、最初は何を言っているのか全然わかりませんが、半年ほど経つと単語の切れ目がつかめてきます。やがて固有名詞がわかってくると、何を言いたいのかが何となく理解できるようになります。そして1年くらいで、何とか日常的な会話ができるようになります。その間に、現地の人と同じものを食べ、一緒に寝起きしながらラポールを確立し、2年目にはいよいよ本格的な調査に取りかかるというわけです。

調査の方法は研究の目的によってさまざまですが、ちょっとしたおしゃべりから本格的なインタビューまで含めた「聞き取り調査」や、人々と生活を共にしつつその振る舞いを観察する「参与観察」は、ほとんどの文化人類学の調査研究で行われています。

現地の社会にとけ込んでしまっただけでは客観的な観察などできないのではないかと思うかもしれませんが、考え方や振る舞い方のまったく異なる文化の中では、共に暮らしてみることでしか人々の視点を理解することはできません。「参与観察」では、「参与」しつつも、自分の主観にとらわれないように意識して「観察」を行うことが重要になります。このほかにも数値的なデータを収集して統計的な分析を行う場合もあります

！ 全く異なる価値観に触れることで ！ 生き方の可能性を広げる

文化人類学の研究対象は、人間の文化や生活様式ですから、研究対象によってさまざまな「○○人類学」が存在します。例えば、宗教に焦点をあてれば「宗教人類学」になりますし、医療をテーマにすれば「医療人類学」になります。他にも言語、経済、ジェンダー、セクシャリティ、教育、心理など、あらゆる文化的な事象が文化人類学の対象となり得ます。地球上の人類文化の観点から眺めてみるならば、文化人類学の対象にならないものはありません。

私は、まったく異なる価値観に触れることで、自分たちの暮らしを根本から問い直してみたいという考えから研究を進めています。学生時代からさまざまな国を訪れてきましたが、2006年からはマレーシアのボルネオ島の狩猟民であるブナンを対象として調査を行っています。

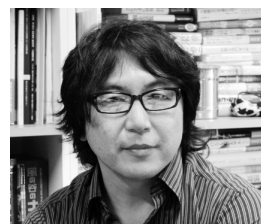
ブナンの人口は約1万人で農耕はほとんど行っていません。狩猟によって糧を得ている彼らは、朝、目覚めるとたいい食べ物がありません。その日の狩りで獲れた

野生動物がその日の食事になるのです。そのような「その日暮らし」の生活習慣のもとに生きてみると、時間に対する観念が希薄になります。「将来」という意識がないので、子どもに対して「大人になったら何になりたい？」と質問することが意味を成しません。深刻に過去を振り返ることもないため「反省」という言葉もありません。向上心も希薄なように感じられます。

また、子どもたちは学校にもほとんど行かず、大人と一緒に狩りに行きます。マレーシア政府が小学校を用意していますが、私が調査しているグループの人たちのなかでは、ここ30年間で小学校を卒業した人は数名程度です。学校の勉強よりも狩猟民として糧を得ることが最も大切であると考えているのです。

こうした社会を目の当たりにすると、時間に縛られ、学校に行くことが当たり前で、常に向上心を持つことを強いられ、成功するために努力し続けなければならない日本社会の在り方を立ち止まって見直すことが可能になります。学校が絶対的な存在ではない社会があると知るだけでも、社会の在り方に対する幅広い視点が芽生えてきます。

このように、自分とはまったく異なる価値観の存在を知ることは、自己の想像力の限界を押し広げることであります。グローバル社会で活躍するにあたって、自分の所属している社会の価値観だけに縛られず、広い視野を持つことが重要になります。困難にぶつかったときにも、文化人類学を通じて、さまざまな方策を検討することができるようになるのではないのでしょうか。



PROFILE

奥野 克巳
(おくの・かつみ)
桜美林大学人文学系リベラルアーツ学群
国際学研究所国際学専攻 教授

1962年滋賀県生まれ。1998年一橋大学大学院博士後期課程社会学研究科地域社会研究専攻修了。高校時代から「日本脱出」が夢で、20歳のときに単独でメキシコの山岳民族・テペワノの村で暮らす。以後、バングラディッシュで僧の修行をするなど、バックパッカーとして世界を歩く。商社に就職するも3年半で退職し、インドネシアを1年間放浪する。27歳で大学院に入り、1994年から2年間インドネシアで「シャーマニズムと呪術」をテーマにフィールドワークを実施。2006年にはマレーシアの狩猟民・ブナンを対象に1年間のフィールドワークを行った。2008年より現職。著書に『人と動物の人類学』（共編著）、『セックスの人類学』（共編著）、『医療人類学のレッスン—病いをめぐる文化を探る—』（共編著）、『人と動物、駆け引きの民族誌』（編著）、『帝国医療と人類学』など。